

WAYプロジェクト 9

今回は地域からPTA会長の石口さん、葛中学校から松田さん、高校の先生、市P顧問の齋藤さんにご参加いただきました。

前回は「12月2日からスタートする哲学対話を取り入れた授業に向けて、第1回目のテーマを何に設定するのか」という議論を行いました（前回のWAYプロジェクト8をご参照ください）が、今回は内容考察に戻り、「よりよい学校生活」について議論をしました。

テーマは

C-15 【よりよい学校生活、集団生活の充実】

教師や学校の人々を敬愛し、学級や学校の一員としての自覚をもち、協力し合ってよりよい校風をつくるとともに、様々な集団の意義や集団の中での自分の役割と責任を自覚して集団生活の充実に努めること

である。

この内容についてまず、生徒にとってのよりよい学校とは何なのかということが議題にあがった。松田先生から、以前葛中学校で行ったアンケートの件についての内容が話された。そのアンケートの結果、多かった意見として「家で好きな時間に起きて、動画等を使って勉強できる学校。学校に行かないからといって友達との繋がりが無いわけでも、仲が悪いわけでもない」というものであったという。そういったアンケートの解答もあり、葛中学校では昼休みなどの時間に先生も生徒と一緒に遊んだりしているという。そこで集団生活の充実、その充実のために必要な人間関係を築き、深めようとされているのだという。

次に吉野高校の場合はどうなのか。高校は地域の生徒が集まるのではなく、奈良県内の様々な場所から生徒が集まってくる。そうすると、小中学校より生徒同士の繋がりは薄くなるのではないかと思われたが、吉野高校は科によって実習等を経験することで徐々に互いのことを知り、学級ではお互いがお互いを認め合っているのだという。つまり全く薄くなることはないのだ。

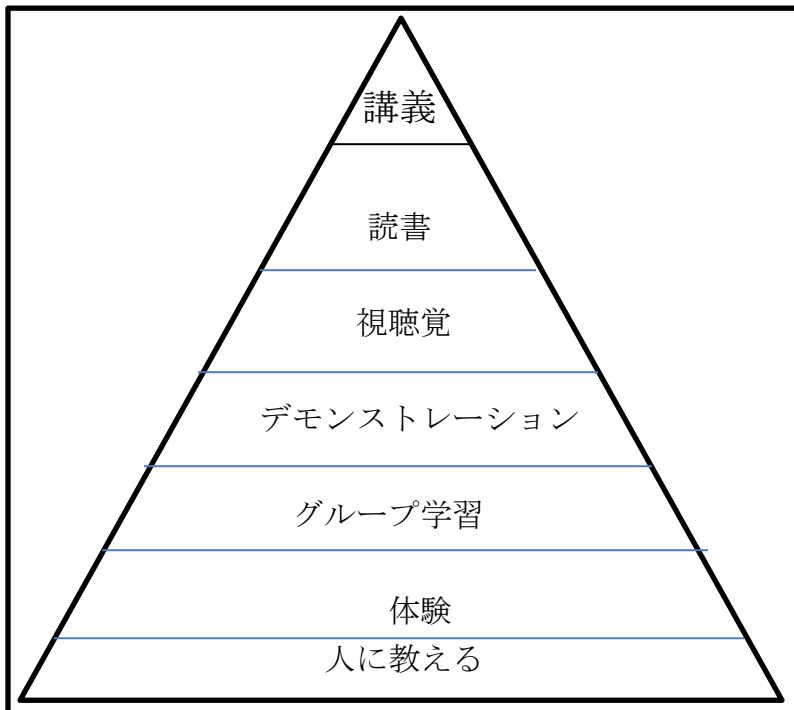
本校では、昔から授業座席スタイルを生活班として、4～6人を4～5グループに分けて向かい合わせとなった席で班長を中心に授業を受けている。実際にその成果もあってか、班の誰かが一人授業中に今やっているページが分からず、困っているときは「今ここやってんねんで」と教えたり、「ここはこうやんねんで」とサポートするなどして、生徒達が自主的に教え合うなどの動きが生まれている。しかしこの班を作るときには一つ必ず基準とする点がある。それは「仲良し班を作らないこと」である。元から仲が良い生徒同士で班を作ると、クラス全体がまとまらない可能性が生じるのである。小学校の時には「みんなと仲良くしなさい」「多少のことは我慢しなさい」



と教えられる。確かに大正中学校の生徒は全員仲が良い。それも濃い繋がりのある仲の良さだ。しかし決して粘着質ではない。時には相談にも乗り、優しい言葉を投げかけるだけでなく、時には厳しい言葉を投げかけるのである。その行動が結果的に「仲良くする」ことを生徒自身で促しているのではないかと考える。ところが中には批判的な声もある。班の中で誰かが騒いでいると集中できない、席によっては黒板が見にくいという意見もあるのだ。しかし、そういった声もカバーできるのがこの‘生活班’なのではないか。ただ授業を受けさせるためだけの生活班なら、確かに意味がない。今後ロボットやA Iが発達し、人間の仕事のほとんどが代わりにできるようになるといわれているが、人間同士の繋がりにはロボットやA Iには立ち入れない世界である。その繋がりを意識し、それをどのように生かしていくのか。それを考えられるようにするための一種の手段として本校は‘生活班’を用いているのだ。そして先生達も授業中に積極的に生徒達に発問し、生徒に思考させるため、様々なことを投げかける事を意識して授業作りをしている。つまり知識注入型よりもアクティブラーニングを取り入れた授業なのだ。それは今回のテーマの「よりよい学校生活、集団生活の充実」に繋がるのではないかと考えている。



ここで斉藤さんが「ラーニングピラミッド」というものを提示してくださった。以下の図が「ラーニングピラミッド」である。



このピラミッドはこの行動をとった場合の学力の定着度を表している。上から5%→10%→20%→30%→50%→75%→90%と下にいくにつれて増えていくのである。特に下の三点については本校において先述した‘生活班’で実践できているのではないか。

今後はこのラーニングピラミッドをふまえつつ、「よりよい学校、集団生活の充実」を意識して授業作り、学級作り、学校作りを進めていこうと再認識した回でもあった。

(文責・堀栄)